

東大駒場ライターズ・スタジオ視察報告

—ライティング能力を涵養する自律学習プログラム及び環境の構築—

英米学科 大森 裕實
学務課 川島 香織

高等言語教育研究所から派遣されて平成 25 年 12 月 10 日に実施した東京大学駒場ライターズ・スタジオ (KWS) への視察を通して得られた知見を報告する。本視察に関しては、同大学院総合文化研究科博士後期課程に在籍する中竹真依子さん (KWS の TA も兼務) にお世話になったこと、また、同視察内容の一部は「第 15 回言語教育研究会」(2014.2.18) において報告したことを附記しておく。



(東大駒場キャンパスの象徴 1 号館全景)



(現在の駒場ライターズ・スタジオ前にて)

1. 視察日程及び内容

調査訪問(平成 25 年 12 月 10 日)——東京大学駒場キャンパス奥に位置する「駒場ライターズ・スタジオ」(Komaba Writers Studio)に到着し、実際のライティング指導の様子を参観しながら、Director のトム・ガリー (Tom Gally) 准教授、ALESS プログラムの創設から関係する板津木綿子准教授(大学院総合文化研究科)、現スタジオ・マネージャーの片山晶子特任講師に現役院生の中竹真依子 TA を交えて 2 時間を超える意見交換を実施した。

本スタジオは「グローバルコミュニケーション研究センター」の傘下であり、同研究センターが推進する ALESS (Active Learning of English for Science Students) 及び ALESA (Active Learning of English for Students of Arts) プログラムを実行する最前線基地の役割を果たしている。“森を動かす。世界を担う知の拠点へ”という東大の行動シナリオを具現化しているといってもよい。

2. 東大駒場ライターズ・スタジオ(KWS)の概要と特徴

(1) ライティングセンター設立への胎動

東京大学教養学部英語教室が教養課程の効果的英語教育を標榜して、養老孟司教授を中心に編纂した *The Universe of English* (1993) が読解力向上に寄与する斬新なテキストとして一世を風靡したことは記憶に新しい。その後、ライティング力向上を意図した *First Moves: An Introduction to Academic Writing in English* (2004) が高田康成教授を委員長とするアカデミック・ライティング企画制作委員会により編まれたが、それは北米の高等教育機関で盛んに行なわれる Writing Across the Curriculum (WAC) を意識したものであったに違いない。なぜなら、2002 年から高田教授を代表とする「英語教育に関する研究」(文科省委託研究) が実施され、2004 年にはいわゆる“高田レポート”『21 世紀に相応しい大学英語像の創出と実現に向けた意識調査〈中間報告〉』が公開されているからである——国公立大学(短期大学を除く)に対するアンケート調査から、バランス良く習得すべき英語 4 技能の授業時間配分に関して、ライティングは理想(11.5%)と現実(5.0%)との乖離が著しい状態に置かれていることが改めて確認されたと見える。翌 2005 年には 1~2 年生向けの教養課程で実施する Critical Writing Program (CWP) が新設され、ライティングによる発信力重視の英語授業が展開される運びとなった。やがて、英語論文執筆の必要性に迫られる理系の学生がアカデミック・ライティングに強い関心を示したことから、2008 年には理系 1 年生を対象とする ALESS プログラムが設置され、「グローバルコミュニケーション研究センター」(旧教養学部附属教養教育高度化機構) がその運営を担っていくことになる。

(2) ライティングセンターの誕生から本格的軌道へ

駒場ライターズ・スタジオ(以下 KWS)は上述の ALESS プログラムをサポートする部門として 2008 年 4 月に設置される。東大駒場キャンパスの 1 年生は約 3,000 人で、そのうち理科 I - III 類の学生が 60%(約 1,800 人)を占める。ALESS は 1 クラス 15 名の学生で、このプログラム特任の外国人講師が担当し、授業は All in English で行なわれる。学生は科学実験のテーマを選び、一学期の間に実験を行ない、その結果を分析して英語論文を作成すると同時に、学期の最後にはプレゼンテーションも課せられている——世界に発信される科学論文の 95%は英語によるという信念に基づく。とはいえ、多くの学生にとっては、長い英語の文章を作成すること、かたて加えて、科学論文を執筆することは未知の体験であり、それにはそれを支援してくれるライティング専門機関が必要となったことは当然の理であろう——それこそが KWS 誕生であった。事前に北米諸大学のライティングセンターを調査視察し、国内で最も進んでいると思われる早稲田大学のライティングセンターを参考にして、日本の大学に最も適合したライティングセンターを考究したうえでの設立である。ただし、当初は学内で専有のライティング指導施設を確保することはできず、毎年のように、指導場所を移動していた[板津准教授談]。2011 年から、現在の 21 Komaba Center for Educational Excellence 2 階に KWS を開設した(上掲の写真参照)——2014 年には教養教育棟が新增築されるため、その 1 階を KWS に使用する予定である。現在では、東大総長も KWS の必要性を理解して、年間 1,850 万円の予算が計上されている。

また、ALESS の方法論を活かして、2013 年 4 月からは文科 I - III 類の文系学生(約 1,200 人)を対象とする ALESA プログラムが開始され、その支援も KWS が担うことになったが、理系の科学論文と異なり、文系の学術論文の場合は多様性が大きく定式化されていないため、文系ライティング指導には難しさを伴う——ALESA については端緒についたばかりである。

3. ALESS / ALESA と KWS の協調型学習プログラム

ALESS プログラムでは①科学論文の論理的構造の理解と論文作成法の習得;②個人またはグループで考案した実験に基づく科学論文の執筆——Abstract(要約)+IMRAD(Introduction, Methods, Results, Discussion)による論文の組立て方;③フォーマルな文体と語彙の使用法(「日本の高校までに学ぶ英語は、たとえリーディングの場合でも、口語体と論文体の間のようなもので、本格的な学術論文に触れる機会がないため、将来、海外の学会報告やNPO調査報告、さらには企業で要求されるレポートを書く際に役立つ有意義なものである」[ガリー所長談])を目標に設定し、1年生を対象に1クラス15名の少人数制の必修が特徴である。

本目標達成のために、2つの支援体制を組んでいる——①科学実験に対するサポートとして、ALESS Labを設置して(2011年から)、理系の大学院生がTAとして実験指導をする;②英語論文作成に対するサポートとしてKWSを設置して、文系の大学院生がTAとしてチュートリアルに当たる(現行は19名体制)。



(トム・ガリー所長を囲んで一右手が大森と川島)



(現駒場ライターズ・スタジオ内指導風景)

KWSはWeekdayの午後(12:10~16:20)に予約制で、上述のTA(多くの場合Academic Writing教授法の指導を受けた者)がチュートリアル(1回30~40分程度)を行なうが、基本的に「添削」は行なわない。ALESS受講生に対して先輩(Big Brother)として、当該学生のテーマ選びや論文の作成法、科学論文に求められる明瞭さ(clarity)と正確さ(accuracy)が執筆に反映されるように助言を行なう——ソクラテスに擬えれば、当該学生自身による「気づき」を誘発する助産術(あるいは問答法)を駆使することに他ならない。この趣のTAによるチュートリアルが効果的であることは、前述の中竹真衣子氏による第52回JACET国際大会での発表「ライティングセンターにおけるチュートリアルのフィードバック分析—自立した書き手の育成に関する一考察—」(2013年度大学英語教育学会賞[新人発表部門])により証左されている。これは研究成果(Product)よりも研究過程(Process)を重視するKWSのモットーをよく現わしている[片山講師談]。また、これまでKWSで指導を受けた先輩が活用した研究題材を集めた資料、完成度の高い既提出論文を集めた年報ALESS: A Collection of Student Papers——“The Slipperiness of Banana Peel”や“Hair Damage Caused by Straightening Iron”といった受講生の独創性の高さを示す多様な実験レポート、大学院生が学会で発表したポスター等をKWSに掲示して、学生の学習目標を具体的に示すような工夫も施されている。

このような点に鑑みると、KWS の協調型学習は成功事例であるといつてよいが、対象学生として約 3,000 人（内、理系約 1,800 人）を擁する駒場キャンパスですべての学生を指導することは難しいようだ。2013 年度の場合には、1 学期当たり 500 名程度の受講者があり、1 年間の延べ数では約 1,000 名程度が KWS を利用したとのことである。

4. 視察から得られた示唆に基づく本学改善のための提言

(1) 授業担当教員が Essay Writing を受講生に課して、それに「添削」を加える従来型の方法は、英語表現技術を丁寧に学ぶ芸能型・武道型の少数精鋭主義の対面授業として今なお意味をもつ。しかし、今回視察した KWS のような、受講生中心の協調学習方法では、むしろ同じクラスの学生によるピア・レビュー (Peer Review) や大学院生 TA による対話法が効果を上げていることが分かる。本学でも、ライティング授業において個々の教授者が工夫を凝らし、ピア・レビューを導入している場合もあるが、1 クラス当たりの受講生数を考慮すると、時間をかけて各々の受講生の思考形成や学術論文作成に影響を与えるような指導は難しく、「多言語学習センター」(iCoToBa) を活用したライティング支援体制の整備は焦眉の課題であろう。

(2) 東大駒場の場合には、ライティングセンターはかなり特異な環境にあるといえる。将来の日本を支えていこうとする学生の自負心と気概が存在し、それが英語による表現力の向上、特に、英語論文作成力の向上に対する心的態度を高揚させている現状がある。而して、同大学院生の TA でなければ、すなわち、他大学からの非常勤 TA であれば、Big Brother としての説得力も半減するのであろう。しかし、程度の差はあるにしても、それぞれの大学において、先輩が後輩に対して実体験に根ざしたアドバイスを適宜与え、共に考えていく協調学習の姿は理想的なものではあるまいか。幸い理系の場合には、大学院進学率も高く、定式化された学術論文作成が可能であるため、東大駒場同様に、まずは理系学生の教養教育における英語授業から試みることも一つの方法である。その際に、英語論文作成の支援については(2014 年度から導入する)教養教育センター所属の外国人教員がその一翼を担うという愛知県立大学方式も考えられてよい。

iCoToBa から weCoToBa へ

KWS 視察の動機は、本学の多言語学習センター iCoToBa の将来的な運営体制を思い描くことでした。視察中にも iCoToBa ならこんなことができるかも、と想像が膨らみました。

KWS の第一印象はとてもシンプルなことでした。その部屋は白一色で統一され、洒落たチェアも、温かい間接照明も、目を引く看板もありませんでした。勉強する単位も常に 2 人です。視察中にも 3 組のチュートリアルが黙々と続いている姿を見て、常に自分を支えてくれる先輩がいることが、学習単位を学生個人の「i」から学生同士の「we」に変えているのだと思いました。それは KWS が築いたこれまでの実績の結果なのでしょう。潤沢な資金源に頼らない、本学に適した学習体制を見出すことが将来の運営基盤となることを実感しました。

(川島香織記)

参考文献

- 大森裕實(2010)「第 8 章 ライティングの問題点と新たな視点」『リーディングとライティングの理論と実践』(英語教育学大系 10) pp. 107-118, 大修館書店。
- 木村友保, 他(2013)「日本のライティングセンター調査」『名古屋外国語大学 現代国際学部紀要』第 9 号 pp. 127-143.